

☒ 話すこと ☒ 書くこと☒ 個に応じた教材の作成や指導の充実
☒ パフォーマンステストでの活用☒ 授業での活用
☐ 課外活動での活用☒ 家庭学習での活用実践の
ポイント

AI活用による言語活動の充実と、AIのサポートと教師の指導のベストミックス

実証概要

<校数> 3校(中学校:2校、高等学校:1校) <人数> ●900名(中学校:271名、高等学校:629名)

<学年> 中学校:第2学年、高等学校:第2、3学年

<アプリ等> WorldClassroom(HelloWorld)、GELP(ベネッセコーポレーション)

<AI機能について> 【中・高】音読練習機能(授業で扱った英文の音読練習、評価)、【中】英会話練習機能(人とのやり取りの前にAIで練習)、【高】添削機能(生徒が話したり書いたりした英語を添削、評価)

AIの効果的な活用方法や取り組み (AI英語モデル校事業)

●【中学校】言語活動の充実を目指したAIの活用

教師は、単元の終末に設定した「自分の考えを即興で伝え合う」などのパフォーマンステストや言語活動のゴールを生徒に明確に示し、そこに至るまでの習得・活用のプロセスの中でAIを戦略的に活用することとした。具体的には、新出語句や表現の定着を図る段階において、生徒はAIを活用し、個々の習熟度に応じた音読練習やリハーサルを行った。これにより、教師は一斉指導では不足しがちだった「個の発話量」を十分に確保し、生徒が自信をもって実際のコミュニケーションに臨むための学習を充実させ、生徒の実態に合わせて声かけ等を個別に行うことができた。また、教師はAIとの練習を目的化させるのではなく、「次の時間のペアワークで、自分の意見をALTに伝えるため」といった明確な目的意識を生徒にもたせるよう働きかけた。このように、教師が意図的な設計を行うことで、単元全体を通じた学びの連続性と質的な充実を図ることができた。

●【高等学校】音声面、言語面でのフィードバックとしての活用

音読練習での発音矯正、話したり書いたりした英語のブラッシュアップのためのフィードバックとして活用した。とくに、個別のフィードバック機能により、教師の指導の内容や質が向上した。アプリの特性上、音声面や言語面のフォローとして活用することになったため、その結果、教師は、英語の内容面の指導や、全体的につまずく傾向のある部分を精選して重点的に指導することが可能になった。良質なフィードバックを適切なタイミングで行うことの重要性に教師が気づいた。

実践成果の検証結果 (AI英語モデル校事業)

①生徒の英語力の変化

【高等学校】「話すこと」のCEFRレベル(高2)

	A1相当	A2相当	B1相当以上
事前	8.9%	90.5%	0.6%
事後	3.2%	95.8%	1.0%

【高等学校】「書くこと」のCEFRレベル(高2)

	A1相当	A2相当	B1相当以上
事前	33.1%	62.8%	2.5%
事後	12.0%	74.0%	12.3%

②生徒の関心・意欲の変化

【高等学校】「英語を話すことは緊張するか」(高3)

	授業	AI利用
緊張する	63.4%	34.6%
リラックスしている	36.6%	65.4%

【中学校】「英語が話す力が付いたと思うか」

	6月 (事前)	12月 (事後)	増減
当てはまる、どちらかといえば当てはまると回答した生徒の割合(%)	35.3	69.9	+34.6

AIの活用により、不安の軽減や自信の高まりが期待できる。

③教師の指導の変化

【高等学校】

- ・言語活動時間の割合
事前:50~75%
事後:75%~
 - ・パフォーマンス評価の頻度
より頻度が増した:100%
- 【中学校】
- ・英語による発話量・発話時間
増加した:100%

AIの活用により、言語活動時間や発話量が増加し、指導や評価の改善につながったと考えられる。

AI英語活用リーダーの育成や普及に関する取り組み (AI英語活用リーダー事業)

●積極的な授業公開や研究発表によるリーダーの育成と取組の普及

リーダーは県外の先進校視察や、指導主事や外部助言者との協議を通じて、AI活用の新しい実践を推進した。リーダーの授業を積極的に校内の教師、県内の教師、他府県の関係者に公開し、取組内容を普及させるとともに、授業後の協議において、活発な意見交換、情報共有、議論を行い、さらなる活用の充実につなげた。また、研究発表の機会を設定し、積極的な情報公開とAI活用について意見が交わされる場とした。校内では、リーダーを中心として教科または学年の打合せを頻繁に開き、AI活用の場面や方法、最終的な目標に関して教員間での共通理解を図った。

事業全体を通じた成果や課題、今後の取り組み (AI英語モデル校事業・AI英語活用リーダー事業)

●言語活動の充実と教師の指導のあり方の変化

AI活用により中学校、高等学校とも、言語活動の充実につながるとともに、教師の個別支援、全体指導をよいタイミングで効果的に行うことをより意識するようになった。教師が「教える」立場から「支援する」立場への変容が見られた。

●AI活用の目的の明確化、単元全体や年間の指導を見通した活用

家庭学習の充実のためには、AIを何のために使うのかという目的意識を生徒にしっかりもたせること、また、教師は単発での活用ではなく、単元や年間を見通した活用計画を考えることが、さらなる指導の充実につながる。

